発達心理学の理論と展望
ー発生的記号論序説へ向けてー

小島　康次

令和元年9月22日（日）　16時40分～17時40分
認知発達理論研究会
第59回例会ショートレクチャー

1

私の研究履歴

田島信元先生との出会い

- 北海道教育大学卒業論文：学習心理学
  媒介過程論　対連合学習におけるイメージの役割
  ［学習と記憶］
- 北海道大学大学院修士論文：卒業論文を発展させて、実験条件を複雑にしただけ
  ［学習と記憶方略の年齢的変化≠発達］

2

博士課程試験における挫折

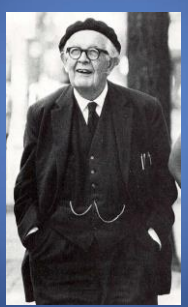
修士論文から博士課程へのステップ

- 連合学習におけるイメージの役割（媒介過程説）：「イメージ媒介」論

イメージとは何か？

3

Jean Piaget



4

ピアジェとの出会い1

- イメージとは何か？
  ➡シェマ
- シェマ（スキーマ）とは何か？
  ⇒　知識
- **知識**は**構造**的である（ゲシュタルト学派）

5

ピアジェとの出会い　2

連合論から認知論へ

心理学の世界における
認知的転回（Cognitive turn）

新行動主義➡認知心理学

6

ピアジェとの出会い　3

学習論から発達論へ

- 博士課程でようやく
  発達心理学の研究へ目覚めた
- 発達的変化≠学習
  ＝**構造的変化**

7

私の問い
多くの発達研究者に共通の問い

- 構造的変化のプロセスとメカニズム

⬆

- 発達的変化はどのように起こるのか？
- なぜ、生命体は環境との間に安定した関係を構築できるのか？

8

1980年9月16日

巨星　墜つ！

9

アメリカにおけるピアジェ離れ

知識の領域固有性

1980年代：ピアジェの死によってチョムスキーによる生得説が主流になる

- 認知構造は段階的に変化する　ピアジェ
- 認知構造は生得的に備わっている　チョムスキー

10

認知発達の理論と展望
—ピアジェ理論への新たな視点—
小島康次（1987）

11

隠れたリサーチクエスチョン

- 拙著『認知発達の理論と展望—ピアジェ理論への新たな視点』において、ピアジェ理論をその土台から批判するには**記号論**の導入が必須であるという問題意識が私の研究活動の通奏低音となった。

12

12

チョムスキーの生得説

- 言語学者であるチョムスキーは、言語の獲得が学習（条件づけ）ではないことを論証
- 言語能力は生得的であると主張
- 個々の言語（日本語や英語）は生得的でない
- 何が生得的か？：個別言語（**パフォーマンス**）を獲得する普遍的能力（**コンピテンス＝普遍文法**）は生得的である。

13

言語能力を認知能力に一般化

- あらゆる認知能力は「生まれつき」備わっている
- 認知能力は進化によって遺伝的に組み込まれたものである
- 認知能力は領域固有のモジュールになっている

14

生得説と発達

- **生得説は「発達」を発達心理学から追放した！？**
- **なぜ生得的かを説明するのは進化心理学の仕事で、発達心理学の仕事ではない！？**

15

発達研究者の反撃

領域一般の生得的要因を認めることによって、発達段階のような不連続な変化のメカニズムを説明しようと試みた

- ケアリー、S. “生得的制約説”
- カミロフ=スミス、A. “表象書き換え理論”

16

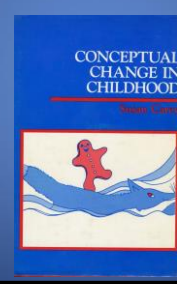
ピアジェとチョムスキーを仲介する理論 生得説と構造的変化の折衷理論

ケアリー、S. 『子どもは小さな科学者か
—J.ピアジェ理論の再考—』（**1992** [1985]）

カミロフ=スミス、A. 『人間発達の認知科学
—精神のモジュール性を超えて—』
（**1997** [1992]）

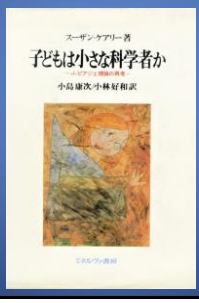
17

Conceputual change in childhood Carey, S.（1985）



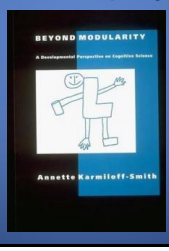
18

子どもは小さな科学者か
―J.ピアジェ理論の再考―
小島康次・小林好和（1994）



19

Beyond Modularity
：A developmental perspective on cognitive science
Karmiloff-Smith, A.(1992)



20

人間発達の認知科学
―精神のモジュール性を超えて―
小島康次・小林好和　監訳（1997）

21

アメリカにおけるピアジェ再評価

- “Rethinking Innateness:
  A connectionist perspective on development“
  by Elman, et.al.（1996）

原著者の中に、カミロフ＝スミスも入っていた！

22

認知発達と生得性
―心はどこから来るのか―
乾敏郎・今井むつみ・山下博志（1998）

23

ダイナミカルシステムズ・アプローチの登場

- Dynamical Systems Approach（DSA）
- 非線形散逸複雑系（単に“複雑系”と呼ばれる）。
- システムを開放系として、その要素を非線形の相互作用をするものとみる。

24

ダイナミカル・システム理論

- Nicolis-Prigogineの散逸構造理論
  プリゴジン＆スタンジェール『混沌からの秩序』
- Haken,H.のシナージェティクス理論

25

ピアジェの発達理論にみるDSAの萌芽

Psychogenese et Histoire des Sciences
藤野・松原訳『精神発生と科学史ー知の形成と科学史の比較研究』新評論
B.インヘルダーの序文：二つの異なる研究関心
1. 構造主義的な発生的認識論の完成度を高めること➡×
2. 発達のメカニズムに関する理論の完全な再検討➡○

26

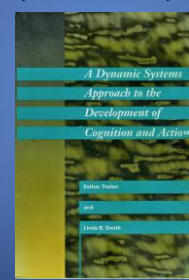
ピアジェ理論をDSAによって研究する可能性

- イリヤ・プリゴジーンは、「生物ー行動ー感覚運動的➡概念的な精神発生」という連鎖は、生物学的構造ーしたがって、認知の構造ーを、物理学に属するダイナミックな均衡の形式に結びつけることにより、下部から補完できる可能性があると述べた。

27

A dynamic systems approach to the cognition and action

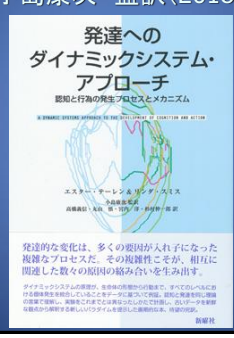
Thelen,E. & Smith, L.(1994)



28

発達へのダイナミックシステム・アプローチ

ー認知と行為の発生プロセスとメカニズムー
小島康次　監訳（2018）



29

ダイナミカル・システムの特徴

- 多くの独立した要素の間に生じる複雑な相互作用を通して「**自己組織化**」が起こるという特性がみられる。
- 局所的な**非線形相互作用**だけによってマクロな秩序が立ち上がる（**相転移**が起こる）。
- **“ゆらぎ”**の増幅による秩序形成、あるいは“ゆらぎ”を契機として要素同士が協力的に作用し合うことによる、巨視的パターンの形成

30

原点回帰
問題と背景のゲシュタルト転換

- 拙著『認知発達の理論と展望ーピアジェ理論への新たな視点』において、通奏低音として響いていた「**記号論**の導入」が、背景から前景へとポップアップした。

31

31

発生的心理学の理論家

1. 2人の発達心理学の理論家
   ピアジェ と ヴィゴツキー
2. 2人の精神分析学の理論家
   フロイト と ラカン

共通点：無意識から言語へ

32

32

発生的心理学と記号論 1

類人猿の道具の利用と象徴（記号）の使用

W.ケーラー：類人猿の道具利用は実践的知能の純粋な文化と呼べるものであり、十分発達している。しかし、象徴の使用とは結びついていない。類人猿の実践的知能行動は、象徴活動とは全く無関係なものである。

33

発生的心理学と記号論 2

子どもの道具的思考について

ビューラー：子どもの実践的知能の出現は類人猿の行為と同様、言語とは無関係であるとした。このような傾向はその後も多くの研究者に受け継がれた。実験観察の対象は言語の発達以前の子どもに関するものだったにもかかわらず、合理的行為の言語的思考からの独立性は、それより後の人間にも当てはまるとされた。つまり、言語の発達は子どもの合理的思考の構造に何の変化ももたらさないというものである。

34

ギョーム と メイエルソン

失語症患者と類人猿

類人猿の道具使用における知的操作は、失語症患者による実践的課題解決の過程と類似していて、重要な契機において一致していることが見出された。この事実は、言語が高次心理機能の組織化に重要な役割を果たしていることを示すものである。

35

35

ピアジェ と ヴィゴツキー
自己中心的言語から内言へ

ピアジェによって提起された自己中心的言語という現象は、子どもの活動に生じた困難や障害の程度に応じて増加することがわかった。ヴィゴツキーは、自己中心的言語とは、原始的な言語的思考、すなわち、声に出された思考の機能であるとした。言い換えれば、外言と内言とのあいだの過渡的な形態とみなすべきものであり、外言ー自己中心的言語ー内言という順序で表すことができる。

36

36

突然、ラカン

37

37

象徴界（記号世界）への参入

人はいかにして言語の世界を獲得するのか

想像的同一化からいかにして象徴的同一化が創発するかについてラカンは次のように考える。象徴的同一化とは、無意識の主体が立ち上がる過程を指し一つの際立った**シニフィアン**が生じることを指す。ソシュールの記号学の原理にしたがって厳密な形式論理的分析を推し進めた結果、シニフィアンを統合している**輪郭線**の存在に行き着く。

38

38

輪郭線とは何か？

輪郭線とは、人の生の外部にありながら、つねにその人らしさを表す不在の特徴のことである。この謎めいた“輪郭線”の正体は何か。それこそが言語である。言語を学ぶことによってわれわれは記号と化す。つまり“人間”というのは一種特有の記号のあり方であり、それに対する呼び名が「シニフィアン」である（Lacan,J ）。シニフィアンとは何かの対象を示す意味の記号ではない。それは消し去るという行為そのものの代理物と考えられる。

39

39

シニフィアンとは何か？

いわば大地に穿った穴（の痕跡）そのものではなく、そこに生じた空無を間接的に示す掘り出した土塊のようなものによって辛うじてその存在を知ることができる受け身的な記号であり、行為そのものでもなく、その痕跡を先送りする反復的な運動を表すものでしかない。

40

40

記号の成立過程

言語のポリフォニー（多声性）について言及している。記号そのものの成立過程の解明に向かうラカンは、主体が想像界から象徴界へと接合されてゆく瞬間の重要性と永続性について繰り返し論及する。なぜなら主体の分割が起こるのも、欲望の対象がシニフィアンにすり替えられるのもこの瞬間においてであり、この最初の結合の場面にこそ象徴内に生きる人間としての出発点が見出されるからである。したがってこの想像界と象徴界の接続がトポロジー的にどのように表現されうるかがラカンにとっての重要な課題とされ、それは後にボロメオの輪という図式によって漸く明示化されるに至った。

41

41

再びシニフィアンとは？

ラカンの理論の中でもシニフィアンはソシュール言語学同様、恣意性と差異の体系の2つを特徴としてもつもっとも基本的な概念である。したがってシニフィアンは自らのうちに自らを支持できるようなものを持たず、他のシニフィアンとの差異によって初めてその意味を知ることができるような存在である。言い換えれば、シニフィアンとはそれ自体では意味をもたない、欠けた空虚な存在だといえよう。しかし、それは別のシニフィアンに対してその無を差し出すことができる開かれた空無である点が重要である。

42

42

シニフィアンの作用としての主体と無意識

シニフィアンの意味は記号内容であるシニフィエではない。それは別のシニフィアンとの関係のもとにしかとらえられない何ものかである。主体自身もシニフィアンによってしか表されることがない以上、主体もシニフィアンの作用によって現れてくるものに他ならないことになる。同様に無意識も言語を通してのみ接近可能なものであり、パロールとの結合がなければ感知されることができないものである。だから、無意識もまた、パロールの**作用**だと言えよう。

43

43

無意識は構造化されている

無意識とはシニフィアンの連鎖を介して初めて現れてくるものであり、それ以前には存在しないものである。人間は言語の世界に参入することによって、同時に無意識を抱えることになったというのはこの意味においてである。無意識は主体に対するパロールの作用であり、パロールの発展のなかで主体が決定される次元でもある。他方、パロールが他者に理解されるためにはそこにランガージュがなければならず、その意味で無意識はまた、言語（ランガージュ）の構造をもっていなければならない。

44

44

主体は記号である

- 言語はわれわれが生まれる前からそこに厳然と存在し、われわれはそれを受け身的に学ぶ他対処の方法がない。自己の外にある言語という他なるもの（大文字の他者）を無条件に受け入れることによって主体は記号となり、自らの消失をシニフィアンによって代理させることができるようになる。
-

45

45

自己は他者である！

- シニフィアンは次なるシニフィアンに回送されて連鎖を形成し主体を生み出していくけれども、それが主体そのものを表すということは決してなく、主体と同じ空無を刻み込まれ先送りされた他者によってのみその役割が果たされることになる。ラカンの「自己は他者である」という命題は、「主体は記号である」というより根源的な命題から導かれたものと思われる。

46

46

ご清聴ありがとうございました

47